

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370866

研究課題名(和文) 米国門戸開放外交の文化的基盤に関する史的研究

研究課題名(英文) The Cultural Origins of the Open Door Diplomacy: A Historical Study of American Anti-Imperialism

研究代表者

中野 博文 (Nakano, Hirofumi)

北九州市立大学・外国語学部・教授

研究者番号：10253030

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は門戸開放通牒の起草過程を探り、米国国務長官ジョン・ヘイの政治顧問であったヘンリ・アダムズ、外交官W・W・ロックヒル、英国の中国海関職員A・E・ヒッピスレーの文書を精査し、女性の国境を越えたネットワークが通牒作成の過程で関係していたことを見いだした。そして、門戸開放通牒の基礎にあった女性たちの反帝国主義の意識は、アダムズのサロンに参加していたエレノア・ローズヴェルトを通じて世界人権宣言に結びついていたこと、またその平和主義は核兵器への恐怖と戦争廃絶運動につながったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study examined the policy-making process of the Open Door notes in 1899 and 1900. When Secretary of State John M. Hay drafted the notes, he depended upon brilliant and unique advisers. Among the most important persons were the historian Henry Adams, the Chinese scholar William W. Rockhill, the Chinese Imperial Maritime Customs official Alfred E. Hhippsley. Beside those persons, women who participated in Henry Adams's salon put a subtle influence upon the notes. This study reveals that women's international network helped to create the Open Door diplomacy. Women's anti-imperialism permeated in Henry Adams's salon was shared with Eleanor Roosevelt. She was a regular member of the salon. Her pacifism spurred by fear of nuclear wars in the early days of the Post World War II era, led her to make the Universal Declaration of Human Rights and to insist upon the abolition of war.

研究分野：政治学

キーワード：門戸開放通牒 女性参政権 A・E・ヒッピスレー W・W・ロックヒル ヘンリ・アダムズ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者、中野は平成 21 年に発表した「20 世紀アメリカ民主政への接近視角」(金井光太郎編『愛国心とアイデンティティ』彩流社、111-134 頁)以来、ヘンリ・アダムズの思想と行動を考察してきた。アダムズは 19 世紀後半から 20 世紀初頭の米国を代表する知識人であり、ジャーナリスト、歴史家、小説家、政治家顧問と多くの顔を持つ。彼の生きた時代、米国の政治と社会を支えていた自由と民主主義の理念が根本的に変化していく。その変化を探る糸口が、アダムズの残した文書にあると、研究代表者は考えてきた。

平成 25 年に発表した「失われてゆく市民としての私」(『中・四国アメリカ研究』第 6 号、23-42 頁)では、研究対象をアダムズからアダムズがつくったサロンに集った人々へと広げることで、考察の深化を試みた。アダムズの邸宅には、ヨーロッパやアジアから訪米した政治家や外交官、知識人が集っており、政治や文芸の議論をおこなっていた。また、そうした議論に、女性が男性と対等な立場で参加していた。こうした議論の場の存在が、米国政治にどんな影響を与えたのか、歴史的分析を試みた。

同論文で強調したのはアダムズのサロンでは、1893 年恐慌の後、資本主義経済に対する不信が充満していたこと、そして、それがヨーロッパの帝国主義外交への反対につながったことであった。ただ、アダムズのサロンに参加した人たちの帝国主義外交への反対については、たちいった考察をおこなわなかった。また、当時、発展途上にあった米国連邦政府の官僚制と、サロンとの関係についても分析が不十分であった。

2. 研究の目的

本研究は上に述べた研究の不十分さを補おうと企図された。アダムズの外政への影響力がもっとも強まったのは、彼の親友ジョン・M・ヘイが国務長官になった 1898 年から 1905 年の時期であった。そして、ヘイの帝国主義への反対がもっとも色濃く表れるのは、1899 年と 1900 年の門戸開放通牒である。本研究は、それが発せられた背景を探るとともに、通牒以降の門戸開放外交がどのような政治的基盤の上に形成・展開されたのかを考察することを目的とした。外交の推移を分析することで、サロンと官僚制の関係、そしてサロンに集った外国人や女性が生じた影響を見ようとしたのである。

現在でも、米国の門戸開放政策は列強間の勢力均衡や米国内の経済団体の利害を軸に論じられている。ただ、そうした歴史解釈で見落とされているのは、列強間の関係や国内利益の調整をおこなったとき、ヘイ国務長官が官僚制に頼っていなかったことである。19 世紀末から 20 世紀初頭の時点において、官僚制は山積する課題に対処する能力をもちあわせていなかった。ヘイが政策立案とその

実施のために依拠したのは、アダムズのサロンであった。上述したとおり、アダムズのサロンには海外の政治家や外交官、知識人が参加しているため、十分な情報が獲得できた。また、ヘイ自身がそうであったように、米国のジャーナリストも参加していたため、世論に訴えかけることもできた。

こうしたサロンの政策形成の場としての性格に注目することが、本研究の目的であった。考察で留意したのは、海外から訪れた男性で、アメリカ人の女性と結婚する者が多かったことである。結婚で生まれた国際的な人脈が、米国外交にどのような影響を与えたのかに注目した。この点、研究のはじめの時点で、期待していたのは、門戸開放通牒で表明されている帝国主義外交への反対が、サロンに参加していた女性たちを通じて、第一次世界大戦以降に受け継がれていったことを確かめることであった。

3. 研究の方法

本研究が門戸開放通牒の研究である以上、門戸開放通牒を作成した人々の文書を分析することが、研究のスタートになる。

1899 年の第一次門戸開放通牒を起草したのが、英国人の中国海関職員 A・E・ヒップスレーであったことは、A・ホイットニー・グリスウォールドが 1938 年に発表した著作 The Far Eastern Policy of the United States によって、よく知られている。しかし、グリスウォールドが生前のヒップスレーから文書を提供されて同書を書いたこと、したがってグリスウォールドはヒップスレーの前半生を詳しく調べたことがないことは、ほとんど知られていない。そこで、本研究はヒップスレーの人物を知ることから考察を始めた。グリスウォールドの著作が刊行された後、オックスフォード大学ボードリアン図書館にヒップスレー文書が寄贈された。その精査をまずおこなったのである。目的は、門戸開放通牒の作成過程について、ヒップスレーの日記、回顧録、書簡等を確認しながら再追跡することであった。

ところで、ヒップスレーをヘイ国務長官に紹介したのは、アメリカ国務省に務めるウィリアム・W・ロックヒルである。彼は北京のアメリカ公使館に駐在していた時期にヒップスレーと知りあった。二人の仲は緊密で、とくにその絆を強くしたのは、ヒップスレーの結婚であった。ヒップスレーは、ロックヒルの夫人に同道して一緒に中国に来ていたアメリカ人女性と恋に落ち結婚したのであった。

上述したとおり、本研究はこうした国際結婚によって築かれた絆に特別な注意を払った。ヒップスレー文書と並んで注目したのは、ヘンリ・アダムズの死を看取った女性エリザベス・ホイットである。彼女は後に駐米イギリス大使となるロナルド・リンゼイと結婚する。ロナルド・リンゼイが駐米大使となったとき、

彼女が親密な関係を持ったのは、アダムズを人生の師と仰ぐ女性エレノア・ローズヴェルトであった。言うまでもなく、彼女の夫はフランクリン・D・ローズヴェルトである。リンゼイが駐米大使であった期間、フランクリン・ローズヴェルトはニューヨーク州知事を経て大統領になる。フランクリンの妻エレノアと、駐米大使夫人エリザベスの関係は、ハイとアダムズが残した門戸開放外交の遺産として本研究でとくに重視することになるものであった。

国際結婚と同じように、国境を越えた人々の絆を生むものとして、本研究が重視したのは、文芸であった。ヘンリ・アダムズの妻マリアンをはじめとして、アダムズのサロンに参加した人々は、1860年代以降、ヨーロッパとアメリカで流行した日本文化に強く感化されていた。アダムズ自身、妻マリアンと交わした約束に沿って日本を訪問し、そこで岡倉天心と親交を結ぶ。アダムズ、そしてアダムズの義理のいとこにあたるウィリアム・ビッグロが、日露戦争で和平斡旋を強く働きかけたのは、よく知られている。この働きかけの基礎になったアダムズらの抱いた東洋認識を明らかにし、門戸開放通牒で示された反帝国主義の基層を解明することを、本研究は目指した。

4. 研究成果

(1) 平成 26 年度は資料調査に重点を置き、ヒッピスレー文書と、ヒッピスレーに関係した英国人の文書について、オックスフォード大学ボードリアン図書館を中心に収集分析した。

ヒッピスレーは家庭の都合があって大学には進まず、収入の約束された仕事を求めて、清朝政府の官庁ながら外国人の手で運営されていた海関に勤める。アロー戦争後、北京に外国人が暮らしはじめたときにヒッピスレーは着任するが、彼の仕事はなかば中国と世界とを取り持つ外交官としての性格を帯びていた。また、海関は港湾整備をはじめ中国で近代的な郵便制度を創設するなど産業開発の推進機関であり、ヒッピスレーはこの機関で総税務司ロバート・ハートに次ぐ重責を担うことになった。ヒッピスレー文書を通じて、北京に生まれたヨーロッパ人とアメリカ人の外交コミュニティの実態を分析した。

こうした外交の世界の分析と並んで、アダムズのサロンに参加していた人々の世界観を知るため、19世紀後半の文芸運動に関する資料も収集した。オックスフォード大学はアダムズが尊敬していたジョン・ラスキン、マシュー・アーノルドが勤務していた。また、アダムズにとって美術の師であったジョン・ラファエルジュはラファエル前派の文芸運動に強く影響を受けていたが、オックスフォードにはラファエル前派の資料が多数保管されている。そうした資料を探る中で、アダムズが駐英公使を務めた父の秘書としてイ

ギリスに勤務していた時代に築いた芸術家とのつながりを発見した。その一つは、アダムズと深い親交のあったキリスト教社会主義者で小説家としても著名なトマス・ヒューズと、資本主義を批判する評論を数多く著したジョン・ラスキンの交流である。

アダムズもジョン・ハイも、そしてこの二人の親友の地質学者クラレンス・キングも文学者であったが、彼らの資本主義経済への批判を理解するためには、ヒューズやラスキンのような 19 世紀中期の芸術家たちが持っていた社会主義志向を理解せねばならないと、本研究は結論づけた。

資料を渉猟するなかでの興味深い発見として、ヒューズもその一人であるが、アダムズと親交のあった人々が、選挙制度の改革に懐疑的な立場を取っていたことがわかった。その代表者は、アダムズのサロンに参加していた米国人女性と結婚したイギリス人政治家カーゾン卿である。彼はイギリスの女性参政権反対運動の中心人物であった。

アダムズのサロンは英米両国の女性参政権反対運動と強い関わりを持っており、第一次世界大戦後に女性の政治運動の旗手となるエレノア・ローズヴェルトも 1910 年代までは女性参政権に反対であったことも、わかった。

以上の成果のうち、アダムズのサロンに参加した人々と日本との関係に焦点をあてて執筆したのが、「ジャパニーズ・コネクション」(『中四国アメリカ研究』第7号(75-97頁))である。この論文で強調したのは、建国期以来のアジア貿易をめぐる英米間の人的交流、そして、南北戦争後の北米大陸内陸の開発で生じた英米間の交流が親日派人脈の形成に貢献していたことであった。

アダムズの妻マリアンの祖父は中国貿易で巨万の富を築いた人物であったし、アダムズの親友クラレンス・キングの叔父は 1836 年に開国を求めて日本を訪れようとしたモリソン号の責任者であった。アダムズのサロンに参加していた人々が日本に関心を寄せた背景の一つは、彼らの親族がアジア貿易に関係していたからであった。

また、日露戦争期に大統領を務めたシオドア・ローズヴェルトが、同時期にロシア駐在となるイギリス外交官セシル・スプリング＝ライスと親友になったのも、南北戦争後に牧畜ブームがあったからであった。ローズヴェルトは自身がダコタ準州で、またスプリング＝ライスは実の弟がカナダで、牧場経営者になったのである。北米大陸の内陸開発はヨーロッパから多額の投資と人材を招き入れていた。ローズヴェルトとスプリング＝ライスの親交はそうした開発ブームのなかで生まれた英米交流の一つである。ちなみに、ヒッピスレーとともに門戸開放通牒を起草したロックヒルも、この時期、米国のニューメキシコで牧場経営の経験があった。

門戸開放外交の形成と展開を考察する場

合、ヨーロッパ、アメリカ、アジアをつなぐ貿易と、北米大陸の経済開発をめぐる生まれた、国境を越えた人的つながりを見なければならぬことが資料調査によってわかった。

(2)平成27年度は前年度に収集した資料を分析し、本研究の中間成果とするため、『ヘンリ・アダムズとその時代』を公刊した。また、この公刊に先立ち関西アメリカ史研究会第249回例会で「門戸開放外交再考」の題目で報告をおこなった(2月7日、キャンパスプラザ京都第4講義室)。

前年度の研究を受けて得られた知見は、門戸開放通牒に結実するアジアでの植民地主義への反対は、建国期から19世紀後半にかけての米国の貿易政策と内陸開発政策の発展のなかで生まれた人的交流を見ていくなかで理解できるということであった。

従来、門戸開放外交は20世紀にアメリカが超大国化していくうえでの一里塚と見なされてきた。しかし、アンテベラム期から南北戦争を経て革新主義にいたる19世紀の間、人々が悩まされた問題と関連づけて再解釈をおこなわないと、適切に門戸開放外交を位置づけることはできない。アダムズやヘイのように南北戦争期に青春を送った人物たちにとって、連邦制が奴隷制をめぐる南北の対立によって崩壊したという事実はきわめて重かった。この崩壊の記憶をもとに、彼らの政治と外交のヴィジョンが生まれたのであった。

二人がなぜ中国に対するヨーロッパ帝国主義に危機感を抱いたのか、その背景について拙著では、南北戦争勃発の前夜ヘンリ・アダムズが下院議員であった父チャールズ・フランシス・アダムズとともに、必死で開戦回避の工作をおこなっていたこと、そして、この危機のなか、ヘイはリンカン大統領の秘書として連邦首都に赴いたことに注目した。未曾有の惨劇となった南北戦争の悲劇を繰り返さないことが二人の至上命題であった。そうした二人は、19世紀末、中国大陸で列強間の対立が激化し、ついに世界戦争が起こるのではないかと危惧していた。この危惧が門戸開放通牒の発布につながったと、拙著では結論づけた。

また、こうした二人の危機感を引き継いだのが、世界人権宣言の作成の責任者となったエレノア・ローズヴェルトであり、彼女が核戦争の危機におびえて戦争廃絶を唱えていたこと、そしてエレノアの親友で、駐米イギリス大使夫人となったエリザベス・ホイットが、核戦争の危機をいち早く見抜いていた人物としてアダムズの名を挙げていたことを、拙著で論じた。

本研究が示したこうした歴史解釈に対しては、南北戦争の記憶が門戸開放通牒に影響を与えていたのが事実ならば、アダムズたちが抱いていた人種と階級に対する意識をより深く分析すべきではないかとの批判を受

けた。また、考察の軸がアダムズとヘイが深い関係を持っていた共和党を中心としたものになっているとの指摘があった。それは、再建後の南部民主党に対するアダムズの関係に着目すると異なる歴史像が現れるのではないかとの意見であった。これを受けて資料調査をより広げることとした。

(3)平成28年度の成果としては、「揺れ動くアメリカの市民像」を『アメリカ研究』第51号に発表した。この論文は、前年度に公刊した『ヘンリ・アダムズとその時代』で提示した歴史像の独創性を浮き彫りにするために発表したものである。リチャード・ホフスタッター代表作『改革の時代』が発表されて以降、本研究の対象であるジョン・ヘイとヘンリ・アダムズは国民の良識に不信をもつエリートと思われてきた。しかし、実際にはホフスタッターこそがエリート中心の政治運営を良しとするエリート主義者であり、ヘイもアダムズも国民が中心となった政治を構想していたことを、「揺れ動くアメリカの市民像」で論じた。

この論文で試みたのは、アダムズとヘイが生きた時代が、20世紀の民主主義とは異なる価値観で動いていたことを強調することであった。それは、研究最終年度にあたって本研究を総括するために、本研究で得られた歴史解釈が史学史の中でどのように位置づけられるか明確化しようとしたものであった。

同論文は、ヘンリ・アダムズが北米大陸の開発を進めたジェファソン期以降の米国民衆の活気に深い尊敬の念を持っていたこと、そして米国民衆の性格が温和で戦争の回避を志向していたと指摘したものであった。アダムズは、米国民は適切な指導者の行動さえあれば平和を維持しながら経済発展をすすめてゆけると考えていたが、そうした見解は、民衆が本来的に暴力的で、国家による介入がなければ社会は安定しないと考えた歴史家リチャード・ホフスタッターと対照的であった。

このような見解を提示した理由は、再建期の歴史解釈とかがわっている。門戸開放通牒を発したヘイ国務長官にせよ、彼を支えたアダムズにせよ、最大の敵であったのは共和党急進派であった。エリック・フォナーの研究によって急進派の改革者としての側面が強調されるようになったが、フォナー自身が認めるとおり、急進派の一部に非民主的で腐敗した政治家を抱え込んでいたのは事実である。そうした腐敗政治家がおこなう歪んだ政治に対して、ヘイとアダムズは激しい憤りを感じていた。二人は、南部を軍事占領することで、連邦政府を思いのままに動かそうとする急進派の手法に反対したのであった。

共和党急進派の中核にいた腐敗政治家とはサイモン・キャメロンやロスコー・コンクリングである。彼らは汚職で蓄財を進めた人物であったが、その蓄財の軸となったのは鉄道利権であった。ヘイとアダムズは、入植の

途上にあった準州と占領下の南部を民主的に開発するスキームをつくらなければ、利権政治家によって暴力的な開発が進み、南北戦争の前夜とおなじように、ふたたび連邦の政界が混乱すると恐れたのであった。

こうした問題意識は門戸開放通牒の作成に引き継がれた。19世紀末の中国をめぐる帝国主義列強の対立が世界大戦の火種になると懸念したアダムズたちの態度は、奴隷制の拡大をめぐる国内対立が南北戦争を引き起こしたことへの反省、そして大陸開発をめぐる共和党急進派への批判と基本的に一致していた。リチャード・ホフスタッターの研究は、こうしたヘイやアダムズの問題関心を正しく理解せず、とくにアダムズは民衆に不信を抱いたエリートの典型としている。こうした歴史解釈は、ホフスタッター自身の政治的関心をあまりにも強く投影しすぎたものであると、「揺れ動くアメリカの市民像」では論じた。

以上のように本研究は、北米大陸の開発政治をめぐる再建期の国内対立の延長線上で門戸開放通牒を理解した。こうした解釈をすすめていくためには、北米大陸開発の歴史を全般的に見直す必要がある。その際、重要なテーマとして浮上するのは、アンテベラム期における民主党とホイッグ党の対立である。この点について、本研究では考察の前提としたが、たちいった考察をする必要がある。具体的には、米国政治運営の基本装置となった政党が、開発政治でどのような機能を果たしていたか、連邦政治、州政治、シティやカウンティのような地域政治と、三層に沿った分析をおこなわなければならない。

それは外交と内政を「開発」という視点で統一的に把握しながら、その開発の推進者であった政党の機能を連邦体制の諸側面で解き明かしていく作業になる。政党が民衆をどう組織していたか、言論の形成にどのように働きかけていたか、政策の執行をどのようにおこなっていたか、つぶさに見ることで、19世紀米国民民主政の実相が明らかになる。このことを次の研究上の課題として発見し、本研究を終えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

中野博文「揺れ動くアメリカの市民像」『アメリカ研究』第51号(2017年3月) 117-137頁、査読有。

中野博文「ジャパニーズ・コネクション」『中・四国アメリカ研究』第7号(2015年3月) 75-97頁、査読有。

〔学会発表〕(計 1件)

中野博文「門戸開放外交再考」関西アメリカ史研究会第249回例会(2016年2月7日、

キャンパスプラザ京都(京都府京都市))

〔図書〕(計 1件)

中野博文『ヘンリ・アダムズとその時代』、2016年、単著、総255頁、彩流社。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 博文(Nakano Hirofumi)
北九州市立大学・外国語学部・教授
研究者番号：10253030

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()